

昭和30年9月1日発行 (B5版)より
関連ページCP引用

アサヒスポーツ別冊

甲子園大會

第37回
全国高等学校
野球選手権大会



¥30

このページは 朝日新聞社様のご好意により
作成しましたので無断で転載することを
禁止させていただきます。

上げ潮にのる打力

小粒ながら攻守にバランス

岩手高校

一切出場

◇第一次予選成績

【一回戦】岩手7-3一関二【三回戦】

岩手12-2黒沢尻北【準々決勝】岩手9

1-3花巻北【準決勝】岩手14-9一戸

【決勝】岩手2-0宮古

◇第二次予選成績

岩手	5	岩	4	岩	4	秋	10
戸	3	戸	1	戸	2	戸	3
盛岡	3	盛岡	7	盛岡	3	盛岡	3
工	1	工	3	工	6	工	8
秋	1	秋	3	秋	3	秋	6
田	1	田	3	田	6	田	8
商	1	商	3	商	6	商	8
古	1	古	3	古	6	古	8
戸	1	戸	3	戸	6	戸	8
地	1	地	3	地	6	地	8
戸	1	戸	3	戸	6	戸	8
手	1	手	3	手	6	手	8

①から【前列】板垣、平野、名久井、田中、村川【中列】沢野、田口(節)、佐々木、小泉【後列】田口(昭)、杉村、松館、福田

奥羽代表

昭和二十一年に野球部が生まれちょうど十年目で甲子園出場を果たした。予選前は5勝4敗の戦績で、スタープレーヤーもいないところから余り目立たなかったが、フタを開けると目まじりに好調。中でも打棒の活躍めざましく、秋田、八月など伝統のあるチームを連破した。数年前、四子、小武方(ともに現南海)の名投手を擁して期待されながら、打力不足で甲子園を踏めなかったのが好対照で、今年のチームは小粒ながら攻守のバランスがとれている。

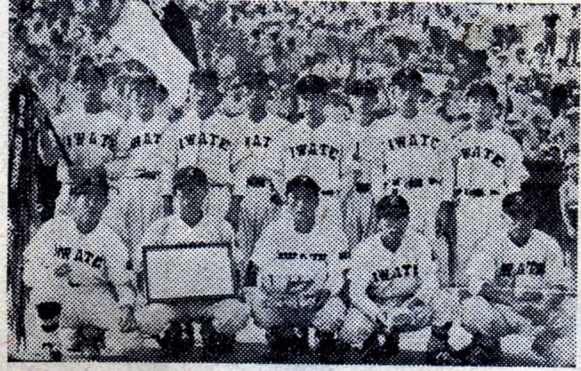
主戦の村川左腕投手は強力な決め球こそ持たないが、プレートまきはなかなか巧みだ。タイミングを外し、豊かなコントロールで内外角を衝く。無理のない投球で連投に耐え、控えの松館はまだ経験不足だから大会ではまず村川一人に頼るだろう。捕手田中は三年続けてマスクをかぶる良い女房役。闘志をみながら、主将として全手インをまとめる功績は大きい。内野陣は地味だが安定性があり、中でも板垣、小泉の三遊間は一年からのコンビで呼吸が合っている。外野では中堅田口はカンがよく守備範囲は広いが、両翼は足が速くやや弱い。

村川投手が二、三本の得点を許すと

学年	背番号	身長	体重
部長	戸嶋 正夫		
監督	川村 昌司		
主将	田中 義男		
投手	村川吉兵衛	2 ① 1.76m	65kg
捕手	田中 義男	3 ② 1.67	62
一塁	名久井光文	2 ③ 1.66	65
二塁	平野 喜三	3 ④ 1.56	53
三塁	板垣 隆夫	3 ⑤ 1.58	55
遊撃	小泉 務	3 ⑥ 1.68	64
左翼	佐々木英雄	2 ⑦ 1.67	61
中堅	田口 節雄	3 ⑧ 1.65	60
右翼	沢野 重安	2 ⑨ 1.68	56
補	村井 慶一	2 ⑩ 1.58	54
補	松館 健五	1 ⑪ 1.72	64
補	田口 昭則	1 ⑫ 1.60	53
補	福田 要	1 ⑬ 1.67	56
補	杉村 衛	1 ⑭ 1.65	56

【所在地】盛岡市仁玉田圃340の1

「個々の選手を見ると特筆する選手はいないが、塊りとなる」と追力が加わる。大敵を恐れない良さがあり、甲子園でも相当闘える」とは鈴木本部長派遣審判員のチーム評。



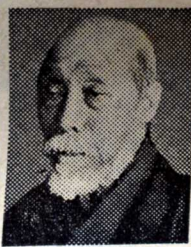


VICTORIVUS PALMER 大優勝旗に纏いとられた

金色の十五文字。たったこれだけの文字に過去三十七年、どれだけ多くの若人たちがあこがれの情熱をたぎらせ、心魂をかたむけたことであろうか。そしてこの旗の下に勝者の久遠のよろこびをうたい、得たのは、三十七年間でわずか四百人定らずの若人ただけだ。栄光への道はいずれの場合でもまことにげわしく、まびしいものである。だからこそ「勝者に栄光あれ」と全国高等学校野球選手権大会の真紅の大優勝旗に刻まれたこのラテン語の金文字は、いっそうサンセンと輝くのである。全国中等学校優勝野球大会以来の長い歴史を飾って来た大優勝旗にまつわる秘話を改めてふり返ってみよう。

値段でもビックリ

大優勝旗誕生の記



故村山権平翁

「金はいくらかかってました。日本一の旗をさへれ」と大正四年七月この大会の開催が決まると同時に、当時の朝日新聞社長村山権平さんが、大会の立案者田村信三記者にこう命じた。そして生れ出たのが縦三百五寸、横五尺、まぎのタタミにたいにたいいかに優勝旗だった。調製者は大阪高島屋、やや黒味を帯びた深紅色の皇國織地に金糸のシシウがサテにて輝いてゐる。まさに日本一の豪華さに関係者たちをおどろかせたが、金千五百円也という高価さにも眼をむかせた。何しろ当時の千五百円といえは、いまの中流へらの家の立派に建った。第一回大会の経費のうちで一番金がかかった全出場選手の大坂までの往復旅費が、さつと七百七十円だったというから、おそそのケタが想像出来る。ところで大優勝旗の生地である皇國織というのが当時としてはまだどこに紹介したシロモノ、立派に出来上がった旗を前にするに胸を躍らせた田村さんが、高島

屋の係員からこの生地の名称をきくなり急に顔色を変えて声をひそめた。「この生地が、皇國織、やというてを絶対だにたれにもいうな。二人だけの秘密やぞ。うつかりや、やることばかどぞぞ」それまで出来はえのよきをきりに自費していた高島屋も田村さんにそのわけをきかされて青くなった。皇國織は当時の天皇様と同じ生地だ。と皇室に關してはハシのこつたようなもので、もうつかりいえない時代だった。それがどいもあつたに当時でいう、たかがマリほりの会に、ニシキのミハタ、と同じ生地の旗をおつたてたどあつては、これがはれたらおそく大会なとふつとんじまう、と田村さんが心配したわけ。そして田村さんはそれ以来村山社長にさえも秘密を押し通し、戦後、朝日新聞の社内座談会の席上ではじめてこの秘密を明かにし心の重荷を下ろしたという。

後年この大優勝旗が古くなるほどに生地がほつれて来たしたが、大会出場選手がこれをひそかに引きまわして腰のお守袋に入れ、プリーをやりながら優勝を祈願した、という子園伝説がいまに伝えられているが、なるほど当時としては神格天皇のお身代りみたいなものだった。ニシキのミハタ、と正体が同じなものであつては、このやへのほろもあつたかなとふつとんじまう。

田村さんは「木国」と身して俳諧「山茶花」を主宰して、いまでもお元気である。

ピョウタンから

コマが出た話

野球にかきらすどんな大会の優勝旗でもまず大会の開催が決まらなくては優勝旗が出来るのが当然の順序。ところがこの大会にかきらす優勝旗の話がさき、あとから大会が生れたという奇妙なコースをたどっている。という説を主張するのが現京都市長の高山謙三さんだ。そして高山さんはこの大会の生みの親は本当は自分だよ、と今でも愛して止まない夏の大会にひそかな誇りを持っている。そこで高山さんのお説に耳をかたむけてみよう。



高山京都市長

大正四年の春四月、サクラの花びらが舞う京都二中のグラウンドで、その年の野球部の新人たちが練習に余念がなかった。グラウンドの片隅の芝生に同校野球部の先輩である高山さんと小西作太郎さん(元朝日新聞大阪本社印刷局長)の二人が寝ころびながら練習場を熱心に見ていた。はつらつたる新人の姿に高山さんは「今年の二中はいい。この調子なら京都のどこにも負けん」と思った。先輩のひいき言だけではないにふつと胸にわいて来た絶対の自信があつた。そこで母校野球部を京都一にする機会をうけてもらいたい、それには「京都の中学リーグ戦でもちつたらちつと」と小西さんにはかつたものだ。同じ思いだった小西さんも即座に賛成、さつと当時好敵手であつた同志社と京都一中に話をもちかけ、京都リーグのお膳立てを進めることになった。話が具体化するにますますほしいのが大会のシンボルである優勝旗だ。それは新聞社に寄付を頼むと同時にこれを機会に他府県の代表チームとの試合も仲介してもらおうと幹事役の意見がまとまり、朝日新聞京都通信部(今の支局)に後援を依頼した。ところがやがて朝日新聞本社から折返して来た返事は「単に優

勝旗の寄付だけではなく、全国的に地方代表の大々的な決勝をもちよむ」といひつゝある。話は急転、京都二中のグラウンドの片隅から全国的な大行事を飛躍した。高山さんのいう、生々の潮、観望以上の湧いてゐる。

とて、朝日新聞社史による夏の大会誕生記によると「大正四年七月初旬、實業鉄道（現在の京阪神急行）の吉岡重二郎氏（現在の東京興行社長）が朝日新聞社を訪れて来た。当時實業鉄道では沿線開発策として豊中に五万坪の原野を手に入れ、その一部をグラウンドに仕立てた。この全国的な競技をもちつゝ、豊中グラウンドの名を全国にひろめたい。それには純粋な学生野球が最適だが、これは全国的に連綿を持つ大新聞社が主催しなければ実現不可能だ、という着眼から話を持込んで来たものだ。この話を田村省三さんが村山社長に取次ぐと、即座に開催決定の英断が下り、その翌月には早くも歴史的な第一回の大会が開かれた」とある。これを大会正史として、高山さんの大会裏面史をつなぎ合わせてみると、時間的な経過からいって、高山さんらの優勝旗寄付申込みの話から、田村さんの胸中には次第に全国大会の大構想が芽生えていた。そこへ吉岡氏の登場となつて急転、夏のチヨウ原が誕生した、といふこと話の筋道がきつて来た。このなると高山説に花を持たせておくのが礼儀といふものだらう。



さてその年の第一回大会に京都二中は、全国の諸校をなぎ倒して見事真紅の処女旗を獲得し、高山、小西（兩人の母校愛は見事に感激の表を結んだのであった。そして、その時の京二中のキャプテンが中啓吉氏、この人が大優勝旗のこれも歴史的な初の担い手であった。中啓吉は巨大卒業後、十年間わたつて母校チームのコーチとして後進の指導に当たり、現在京都大

見にと健在である。

中京商高と

優勝旗の因縁話

東海学生球界の名門、中京商高と優勝旗にまつわる因縁はまぎらひなく懸しきりつづけて大会史上にましまさずの記録を残してゐる。昨年十一月、同校校長室から「リゼン」と大優勝旗が消えた事件はまだ耳新しい話題だが、いすれにしてもこれだけ有名な大会のシンボルが、一時に消え去ることはまず前例のない大珍事記録だらう。幸い三方月目に無傷で発見され、その後は校長室ならぬ銀行の金庫に納まつて夏の大会まで絶対に家を明けさせませんと慎重な扱いをうけている。明るい話題の面では中京は第十七回に初出場するなり「優勝」、ついで第十八、十九回と三回連続優勝の記録をもち樹立、さらに第二十三回、昨年の三十六回と前後五回、大優勝旗となじみを重ねている。この間三回連続の偉業に対して大会初の、そしてその後も例のない、大優勝旗と同形の「三回連続優勝記念旗」を特許されている。普通の優勝記念旗は大優勝旗と同色、同図案をたな形を少し小さくしたもので、大正十二年の第九回大会の時、はじめて制定された。それまでは各選手の手には優勝メダルが記念に残るが、優勝校には何も残らなかつた、といふので優勝校の栄譽をこれに永久に記念しようといふもの。第八回までの優勝校にもこのほつと授与されており、中京は今年の開会式でこれを授けられ、三年連続記念旗と合わせて美に二本の記念旗が、因縁の校長室に飾られることになり、この記念旗は言ひ破られることはなかつた。

大優勝旗に宿る

不滅の大会精神

この大会では第一回の時以外は優勝校に対して優勝記

念旗、選手には記念メダルのほかは賞品のものは一切出さない方針を堅持している。優勝の栄譽は大優勝旗を一年間保持することだけ。物質的に報われなくても日本選手権といふ精神的な誇りは永遠に消えるものではな

い。これこそアマチュア精神といふものだ、といふのが主催者の考えである。だからこそ大優勝旗の栄光はくもる「不滅」な「不滅」も光り輝くのだといへよう。第一回の大会の時だけは優勝メダルのほか、かなり盛りたくそんな賞品があつた。まず第一回戦に勝つた選手には万年筆一本ずつ、優勝チームにはスタンダード大辞典一冊と實業鉄道社長から五十円の図書切手、さらに選手個人には村山社長から腕時計一個ずつ、準優勝校と、各チームの優秀選手一人ずつにはそれぞれ賞品が贈られたのであつた。この当時はアマチュア・スポーツでも賞品や賞金が贈られるのは当然のように行われていた。選手の劣に報い、その勝利をいやが上にも飾りてやりたい、といふ単純な人情からで、世間でも不思議に思つていなかつたことだ。極端な例では、この大会の二、三年前に行われたある新聞社主催の「カントリ・レース」には一等から三等まで何百円、何十円という賞金がかげられ、しかもその賞金はサイフに入れて贈られたといふからウソのよつた話だが、それだけに時代ものんびりしていたといへよう。ところで第一回大会の直後、朝日新聞社内ではアマチュア・スポーツの賞品制度について議論がわき、当時の社会部長長谷川萬次郎氏（如常閣）の主張によつて第二回からは副賞的なものは一切出さないことに決定、大優勝旗が大会の象徴としての精神的価値をいっそう高めたのであつた。この制度は次第にアマチュア・スポーツ界にひろまり、大優勝旗の精神はアマチュア・スポーツ界にさわやかな清風を送つた。